

蘇芳集

空 耳 青山 丈

空耳は空青いから神無月
一つ買ふ鯛焼はもう冷めてゐる
綿虫を滅茶苦茶にして抜けてくる
駅前のポインセチアの赤が濃い
蓮根の細目のものと二本買ふ
境内の銀杏いつもの人が掃く
人參を転がして置く框かな

木の実降る 松原ふみ子

蛇忽忌や川瀬の響き弛みなく
遠山に雲生れそむる朝の鴝
木の実降る湖畔の馬車の二頭立て
水軍の入江暮れゆく鯛雲
穂絮飛ぶ秘めて小さき願ひごと
十五夜の影を連ねて倉庫街
想ひては悼む日数を雁渡し
石たたき 峰岸よし子
石たたき風をたたきてさみしき尾
木の実落つ又落つ風のなき日なり
人を待つ目を遣るたびの袖子の照
一位の実甘し少女の声透り
蓮の実のあとの虚ろへ昼の雨
庭師まだ木にゐて釣瓶落しかな
秋の夜や思案のたびに椅子きしみ

ひとりの歩み

宮尾直美

ひとりにはひとりの歩み秋の風
爽やかや繚れば匂ひて新刊書
露草に牛のやさしき瞳のありぬ
ひとりならままよ高値の秋刀魚焼く
秋風鈴鳴る淋しさを誰か言ふ
そこにだけ風やはらかき女郎花
実むらさきこよなく晴れて酒処

枯れ兆す

八木下 末黒

生き死にの分れ目いかに籠枕
咲き終はらず咲く十月の昼顔
養生のごろごろ秋の暈かな
考へず寝るが養生昼の虫
蟪蛄の手足の運び枯れ兆す
落着いてゐると落着く残る虫
腰かけて秋日のぬくみ御影石

秋の果

吉田幸敏

澄む秋の底ひへハンググライダー
ためらはず千木篁をかふ秋裕
神留守の太虚に月の蝕まれ
戦争を知らぬ親子や七五三
湯を細く珈琲淹れる白秋忌
新そばと半紙ななめに池之端
蝶追つて秋の果まで来てしまふ

さやけくて

小川 美知子

曼珠沙華ずいぶん雨が降つてゐる
月待てば隣の屋根に月の出て
さやけくて鉛筆立たせてみたりする
頬熱く手のひら寒く秋の風
金木犀に道ばたといふところ
黄色と思ひ秋蝶と思ひけり
十月や歩いて行くと風が吹く

草の花

木内憲子

記さねば言葉ほろびぬ草の花
とどまるは日の斑のごとし秋の蜂
とりたてて不思議なけれどねこじやらし
ひやかやガラスの向かうに水が鳴り
水音に耳の足らひて秋ゆふべ
更くるほど平らになりぬ虫の闇
読み書きに足す一灯も暮の秋

遠出

清水裕子

水携へて秋の日の遠出かな
蜻蛉とぶ大蘆原の風にとぶ
渋柿の落ちて傷なく風もなく
やつちや場の昼の閑けさちんちろりん
足元の闇働くや秋の蟻
秋の蟬こゑだして老い深まらむ
久方の句会よ秋の靴履かな

菊まつり

下平直子

菊まつり氏神様の庭掃かれ
それぞれに良し児童らの菊の鉢
菊の香や拍手高く参拜す
菊師いま家康公にかしづけり
日の差して匂ふ瀬名姫菊人形
着替する裸身哀しき菊人形
購ひし菊の盆栽匂ひけり

露けさや

富田正吉

秋といふ言葉が好きで秋と言ふ
露けさや両手でもらふ飯茶碗
流れゆくかたちに水の澄めりけり
露草や今日は岡本眸の忌
とんかつを食ひたき日なり子規忌なり
ほどほどの桜黄葉となりにけり
その先へゆけばかならず曼珠沙華

顔当てて

野路 斉子

少女らは体操服の文化の日
綿虫のふくらんでゐる頬のわた
顔当てて窓の冷たさ何を見ても
末枯や遠きくしやみも人の声
森落葉あの樹この樹の上手下手
先づ森にリボン掛けたくクリスマス
森と云ふ冬日帰つてゆく処

何やかや

別府

優

食卓に顔入れ替はる零余子飯
ポール突くたびに飛び立つ飛蝗かな
世話役のテント膨む神の留守
篠叢の乾ききつたる穴まどひ
怠つてゐる間の釣瓶落しかな
雨音の傘につながらる破芭蕉
何やかや余分に包む暮の秋

風とくぐりて

前田 陶代子

露草は目覚めの色と思ひけり
厄日来にけり日ざらしの橋長し
白萩の白のもみ合ふ日向かな
風とくぐりて秋分の二天門
水音はるかに秋冷の草堤
漂白剤にほふ指先夕野分
考へるわづかな刻を油点草

